## 熊本の児童文学

# 今村葦子『あほうどり』論（下）

堀畑　真紀子

### はじめに

今村作品に通底しているのは、作者が球磨村で過ごした「子どもの時間」である。筆者は『ふたつの家のちえ子』において、日常的な時間とは異なる、効率性や能率性を求めない時間を導き出し、それを鶴見俊輔の言葉を借りて「神話的時間」と称した。その後、『ふゆのよあけ』で、その時間を「子どもの時間」と名を改め、子どもの成長に欠かすことができないものであることを論じた[1]。本稿もその流れに位置し、「子どもの時間」とはどのようなものであるかについて考察することを目的とする。今回採り上げる『あほうどり』は初期四部作[2]の一つで、作者の子ども時代を題材に描かれている。本稿では、子どもの遊びを通して「子どもの時間」とはどのようなものであるかを明らかにする。既に論じた『あほうどり論（上）』では、本作品が『子どもの館』（福音館書店）の投稿作品から単行本になる際に一部変改されたことについて論じた。変改理由は、当時の児童書出版事情により、信太が知的障がい者であるという観点から考慮されたことによる。大きな違いとなった箇所は、ちよ子の信太への言動を、初出で「いたずら」としていたのを、単行本で「いじわる」に改め、初出の「あほうどりとあんなふうな遊びをするのが一番楽しかった」という文を削除した点である。これより、配慮という大人の視点が加わり、あるがままを受け入れていくという子どもの視点が弱まった[3]。しかし、作者は「信太について、知的障がいを持つ子とは作者である私はとらえていませんし、また、それを書いているわけでもありません」と述べている。本稿では、作者の意図を踏まえ、単行本の「いじわる」は初出に従い「いたずら」とし、削除された文も生かして論じていく。また（上）では、高校まで過ごした球磨村には「愛憎、悲喜、こもごも」が存在し、作者に「無常観」を植え付けたことに着眼して作品考察をすると述べている。

しかし、筆者の力不足で、今回は「子どもの時間」の観点でのみ論じていく。

# 一　登場人物の考察

## (一) 信太像

信太のモデルについて、作者は「信太は私が子どもだった頃、身近にいた男の子でした」と述べ、「その子が知的障害をもつ子どもだというふうにはまったく考えもしませんでした」し、「村人達も同じような考えであった」と記している(4)。この作者の主張を踏まえ、信太像を考察していく。

大きな体の信太は、ぽっかり口をあけて、両手を大きくひらいて、目をきらきら光らせて、はらはらと散ってくる桜の花びらを受けとめていました。……ふいと横にそれたり、落ちたかと思うとまた、風にふかれて上に舞いあがったりしました。そのたびに信太は、あちらへ走ったり、こちらへ走ったりしなければなりませんでした。(中略)うすもも色の桜の花びらが、両手いっぱいになると、信太は花曇りの空を見あげて、にっこり笑い、「おがやん……」と言いました。きれいなものを見た時に、ふと言ってしまう、信太のいつものくせでした。

(10・12頁)

信太が桜吹雪と戯れる、美しい場面である。沼田森は信太が「身近にある自然とじつに細やかに交歓することのできる人として造型されている」とし、「信太の交歓する相手は桜ばかりでなく、あらゆる『きれいなもの』」であると述べる。信太像を考察するにあたって、この指摘は注目しなければならない。信太は桜の美しさに心を奪われ、花びらを受けとめるために「あちらへ走ったり、こちらへ走ったり」と体全体で楽しんでいる。桜吹雪と心身が一体化し、喜びが目覚め、爆発しているのである。子どもが放つ、野性的な喜びとも言えよう。例えば、幼い子どもが「路傍のぬかるみの中へ踏みこんでゆき、ぬるぬるの泥の感触を楽しみ、泥水のはねをあげ、もっと深いところを探すことの喜び」と同じで、谷川俊太郎はそれを「理由なき喜び」と称する。信太の喜びは、正しく全身から湧き上がってくる「理由なき喜び」である。それは、草むらの虫や鳥との交歓からも窺うことができる。道の上に張られたコガネグモの巣を眺め、それにかかったモンシロチョウを外したり、ヒヨドリとシジュウカラの鳴き声を聞いたりして、驚き、感嘆し、喜ぶ。鶏の真似をする場面では、タチアオイの花びらを鼻の先に付け、「コケコッコー」とばたばた手を振って鳴きながら畑を横切っていく。その姿は自然と心身が一体化し、喜びが目覚め、行動となって爆発する、「理由なき喜び」である。谷川は、このような感情こそに「生きることのもっとも根源的なかたちがある」と主張する。嬉しいことがあれば全身で喜ぶ。そこに理由

など存在しない、直接湧き上がってくる野性的な喜びの感情である。この感情は幼ければ幼いほど強い。「生きた肉体から直接湧き上がってきた感情、いわば自分が生きているということの他に何の理由もない感情、そのような感情こそがほんとうの感情の名に値するのではないだろうか」と谷川は述べる。従って、信太には、直接湧き上がってくる野性的な喜びの感情を持つ、子どもの姿を見出すことができる。

　また、信太像には鳥の信天翁（以下、鳥のあほうどりは「信天翁」と記していく）の存在も重要である。作者は「あとがき」で、「信太という『あほうどり』のお話を書くときに、私の頭の中には、いつも、この『ほんもののあほうどり』の姿がありました」と述べている。

> ほんとうの「あほうどり」は、世界で最も大きい、うつくしい海鳥です。拡げると二メートルにもなる「あほうどり」の翼は、たいへん力強く、時速百キロものスピードで、四日も五日も、飛びつづけることができるほどです。（中略）この鳥をつかまえようと思えば、それはわけのないことでした。人はそっと、風上から「あほうどり」に近づきます。すると、舞いあがるためには、風上にむかったほうが便利ですから、「あほうどり」は、首をのばして、人間にむかって、よたよたと走ってきます。飛んで逃げようと思えば、自然とそうなるのです。「あほうどり」は殺されました。殺して羽根をとり、「羽根ぶとん」をつくるのである。……そんな「あほうどりの歴史」を読んだとき、私は泣きだしそうになりました。（167～169頁）

　信天翁の研究者である長谷川博によると、信天翁は、長い間、天敵のいない島で暮らしていた為に、人間をまったく恐れなかったという。地上ではのろのろ歩き、長く助走しなければ跳び上がれない為、人間は簡単に捕まえることができた。だから「アホウドリ」とか「バカドリ」などと呼ばれたと説明する。この信天翁の性質を、作者は信太に重ね合わせる。捕獲しようとする人間から逃れられないことや人間を恐れないことは、信太の疑いを抱かない素直さや純粋さ、不器用さに繋がっている。信天翁の飛ぶ力強さは、信太の体の大きさや溺れたちよ子を助ける力強さとなる。具体的に示すと、前者は次のような場面である。「とべっ、あほどり！」と叫んでからかわれても、ちえこ達の歌うような声に合わせ、踵を上げ下げして笑う。がに股で歩いているのを「弱虫のへっぴり腰」と囃子たてられた時も、笑い、頭をかきながら「……虫、踏まねよに」と答える。そして、ちよ子が「虫なんかこうだ」と言って、まっ赤になって地面を踏みつけるのを見て驚くが、それも楽しそうに笑う。梅雨の晴れ間、信太の両手から飛び出した小さな青蛙がちよ子の方に飛び移り、慌てるちよ子を前にして「大丈夫だな。なんにも悪さしないもんな」と、青蛙を慰めるようにつぶやく。また、信太は自分の宝物をちよ子から「ガラクタじゃないの」と貶さ

れても意に介しない。夏休み、信太は道でちよ子と出会い、「タデの花のお赤飯を食べる?」と勧められ、本当に食べてしまう。ちよ子は「ほんものでないことくらい、ちゃんとわかっているはずなのに」と苛立つが、信太は平気な顔をしている。

このように、信太はからかわれても、貶されても反論せず、いつも「にっこり」と笑っている。ちよ子に対しても疑念や反感、嫌気を抱いておらず、むしろ彼女との交流を楽しんでいる。このような信太の素直さや純粋さ、不器用さは鳥の信天翁の性質と重なり合う。「どこかはるかなるところを見ているような、遠い目」(45頁)は信天翁の目であろう。

信太の身体の大きさや力強さについては、本作品の一番の山場、溺れるちよ子を助ける場面で示すことができる。作者が描いた挿絵には、信太の姿が信天翁となっている。作者は信太を今までとは違う、力強く、逞しい、勇気ある少年へと変身させる。

> (ちよ子に堀畑注)抱きつかれて泳ぐことができなくなった信太は、ちよ子といっしょに、渦のまん中に沈みました。ぐるぐるまわりながら、吸いこまれるように沈んだのです。信太の耳は、じんじんと鳴りました。川底に着いた信太は、力いっぱい、ちよ子をつきはなし、それから、ちよ子のうしろにまわって、思いきり川底をけりました。片手でちよ子をうしろから抱きしめて、川面にむかって、力強く水をかきました。心臓が太鼓のように鳴っていました。水面は、すぐそこで青くしわ寄っているのに、水をけってもけっても、その外にでることができないのです。信太はお陽さまにむかって、水をけりました。けりながら、静かにうかんでゆきました。(145頁)

これまでの信太とは異なり、水泳能力に優れ、的確な判断力を持つ、力強い少年である。最首悟が「もともと智恵おくれでのんびりしている子が、俊敏かつ抜群の水泳能力を見せるなど有り難い」と指摘している。これはリアリティーの観点からの指摘である。しかし、この場面はファンタジー風に描かれていると解釈すべきである。信太は日頃から、自らの心と体を自然と一体化させ、野性的な喜びを感じていた。自然をあるがまま受け入れ、その中に溶け込んでいたということである。又、信天翁の性質である素直さや純粋さ、不器用さも持っている。そのような信太だからこそ、力強い信天翁へと変身できたのである。筋が通った中に、幻想が入り込んだ手法である。小林さえによると、小学生の読者は「おとぎばなしや神話風の世界が、まだこの世のどこかに現実に残っていそうな気」がすると考える年齢であるという。読者はこの変身を違和感なく受け入れることが出来るであろう。その後、信太は「だぶだぶのシャツに、だぶだぶのズボンをはいて、黒いこうもり傘をぶんぶん振りまわして、堤防をのぼって」行く。偉業を成し遂げた信太は、いつもの信太に戻り、何事もなかったように去って行く。「小さ

子」話[5]話や昔話を踏襲しているのであれば、主人公は問題解決後、本来の姿のままでいるのだが、信太の場合は違う。そのようにしなかったのは、何事もなかったかのように立ち去る信太の姿に、信天翁の子育てを重ねたからであろう。

信天翁は一個の卵を産み、孵化するまでの六五日、両親が交代で温め合う。生まれた雛は、親鳥よりも体重が重くなるように餌を十分に与えられる。五月になると、半年以上も大切に育てて来た雛を残して、親鳥は島を飛び立っていく。この親鳥の、全てをやり遂げて飛び立つ姿が、信太の何事もなかったように去って行く姿と重なりあう。信太はやることはやった、当然のことをしたまでという思いからその場を後にするのであろう。更に、深読みするならば、そういう思いさえ抱かず、信天翁の親鳥が雛鳥を育てる習性のようなものを、信太の後ろ姿から読み取ることができるであろう。そして、偉業をなした信太が、それに似合わないとぼけたような仕草で去って行く後ろ姿に、作者独特のユーモアを感じ取ることができる。

### (二) 信太像の背景

この信太像には、作者の子どもの時代が反映していることは明らかである。ここでは、それを具体的に見ていく。

作者は物心つく前から祖父母の家で育てられた。教師だった父親の転居先で、病弱な子どもの世話と生まれたばかりの赤ん坊を抱える、母親の苦労を慮り、祖父母が幼い作者を手元に置いたのである[6]。渡の祖父母の家は球磨川の名所、「涼戸の瀬」のほとりにある。敷地内に馬親子、犬、猫、ニワトリなどがいて、広い庭もあった。庭いじりを日課とする祖父から、幼い作者は植物の知識や草花遊びを教わった。同居する叔父からも柿の木登りやメジロの取り方を教わる。夕方になると、馬親子の汗を流すために、叔父と一緒に球磨川の岸辺へ向かう。祖母からは、生活行事の折々に必要な野草や草木のことを教わった。このように家の周りの田園風景と球磨川は、作者にとって欠かすことのできないものであった。小学三年生の時に祖父が亡くなり、一勝地の家族の許に引き取られ、五年生の時、再び渡の祖父母の家へ家族で戻ってくる。そして、球磨川の岸辺に広がる野原は、作者にとって「王国」「夢の野原」となっていく。

> 野山や大川の野原では、村の子どもたちと一緒になって駆けまわっていても、ひとり遊びができました。そこでは誰でも好き勝手が許されます。（中略）野原の群れ咲く花々や河原の石たちが相手をしてくれるのです。（中略）一王寺さんと呼ぶ神社の前から砂地のラッキョ畑を駆け抜けて、その先にある蛇かごの堤防をよじ登り、野原に広がるオキナ草の咲く島々を自分の島だと宣言し、そして大川の河原の石をたたき続けました。石の音は対岸にそそり立つ岸壁にこだまし、筌場瀬（うけばんせ）の瀬音がリズムをかなでました。いつまでやっていてもあきない遊びでした。（今村葦子直筆資料）

ここには、作者が子どもの頃に体験した、自然との交歓の様子が述べられている。内気で喋ることを苦手とする少女ではあったが、野原や河原では、村の子どもたちと一緒に駆けまわり、ひとり遊びも楽しんだ。大川は透き通った深い緑で「ごぼりざぶりごんぶりこともんだりうって流れつづ」け、川下から吹き抜ける風を身に纏いながら、少女は群れ咲く花や河原の石たちを相手に想像の世界を膨らませた。春には野いちごを摘み、秋には野栗を拾い、冬には「ルビーのような紅い実」をつけた冬いちごを探して遊ぶ。服は「草の汁やかぎ裂きや穴だらけ」でいつもボロボロだった。夕暮れになると、フラフラになって帰宅し、御飯を食べる力もなくぼんやりして、毎回母親から注意されたという。球磨川がもたらす自然が作者の感性を育むのである。この時の遊びと感性は信太に反映する。

信太は、「時どき、同じ組の男の子達の後をついて、村中を駆けまわることがありましたが、そういう時でも、やっぱり、途中の草むらに寄り道をしたり、そのままやぶの中に頭をつっこんだりするので、みんなに取り残されてしまうのでした。取り残されても、信太は何とも思いませんでしたし、男の子たちも、信太をほうっておきました（75・76頁）。

信太が村の男の子達と一緒に駆け回りながら、途中で一人遊びに移る光景は、前述した作者の野原や河原で一人遊びに興ずる姿と重なる。河合雅雄は「進化史を通じて人類の存在の根本を形成している諸性質を〈内なる自然〉」と名付け、子どもは群れたいという「内的な自然の欲求」を持ち、その中で社会性を獲得し、又、「人間は高度に自由を欲する動物」で「自由を求める心は内的な自発性・自律性の発現が基礎となっている」と指摘する。作者や信太が村の子どもたちと「群れ」ながら、一方で、一人遊びに興じるのは「内なる自然」のまま行動したのであり、それが可能となったのは、自然の中での遊びだったからであろう。

そこで、信太像については次のようにまとめることができる。

① 信太像には、自然に触れて湧き上がってくる野性的な喜びを持つ子どもの姿が描かれている。

② 信太には鳥の信天翁を重ね合わせることができる。信太の体の大きさやちよ子を助ける時の力強さ、疑いを抱かない純粋さ、不器用さ、無抵抗などが、信天翁と重なり合う。

③ 自然との交歓を楽しむ信太には、球磨川の岸辺で遊んだ、作者の子ども時代の体験を反映させている。

そして、自然との交歓から直接湧き上がってくる野性的な喜びの解放、不器用であるが力強く、疑いを抱かない純粋さ。これらは、子どもに強く備わっているが、大人になっても持ち続けたいと願うものである。

（三）ちよ子像

小林さえによると、ギャング・エイジとは「仲間遊びをする年頃」という意味で、小学四年生頃から始まり、五・六年生が最盛期である。同性による、団結性の強い閉鎖的な集団で、年齢の開きは小さい。成員達は運動や遊びを媒介として結びついており、精神的な交流は薄い。集団の目標達成のために「分業、役割分担、リーダーと追従者」という分化が生じ、これによって「自己中心的行動」を抑制し「協同」という社会的行動を身につけていく。この社会的行動の習得は自己概念の発達でもある。エリクソン理論を提唱する、児童精神科医の佐々木正美は、学童期の「発達課題」は「社会的に期待される活動を自発的に、習慣的に営む」ことができる「勤勉さ」であると指摘する。その為には、同時代の仲間と文化を分かち合う経験が重要で、それは「友達から何かを学ぶこと、友達に何かを教えること」に繋がる。つまり、友達との「共感的な相互依存な生き方」を豊かにすることが重要な要件であると主張する。

本作品では、ちよ子がリーダーで、同級生のゆき子とかなえが追従者、三人は遊びを媒介しての仲間であることがわかる。しかし、「役割分担や分業」など存在しないことから、ギャング・エイジの初期段階といえる。同時に、ちよ子には児童期の特徴も色濃く残っている。佐々木によると、児童期とは「好奇心が旺盛で、あらゆるものに対して自ら感覚運動的に働きかけることによって、ものを考える時期」であるという。つまり、ちよ子は学童期の特徴も有しているということである。このようなちよ子が、信太をどのように受け入れていくのかが、本作品の重要な点である。以下、具体的に考察していく。

ちよ子は、信太と同じ小学四年生である。ちよ子、ゆき子、かなえの三人の遊びは主に自然界に向けられ、草いちごやグミの実摘み、ごっこ遊び、川遊びなどである。ちよ子は探究心が旺盛で、何でもやってみようと、頭や目をよく動かしながら構えている。目に止まった物は、実際確かめないと気持ちが収まらない。例えば、「みんなが登れないような木」があると、飛びだして行き、「口をきゅっとむすび、空をにらみつけるようにして」（15頁）登り、スリルと興奮を味わいながら、自分の身体能力と意志力を試す。自分には無理かも知れないと思っても敢えて挑む。危険を冒し、恐怖感を乗り越えることで、自分の勇気を証明し、自信を得るのである。失敗した時は悔しさにじっと耐える。作者は小学時代の遊びを振り返り、「子ども心に危なかったと思うことはしょっちゅうです。こういったことは親には一切言えません。なんとか自分で凌ぎます。そして、なぜと考えます。どうすればと考えます」と述べる。これは、ちよ子が失敗した時の心情であろう。又、いつも飛び跳ねているちよ子についても、「私のなかでなにかがいつも爆発していました。夢中で本を読みましたが、一方ではじっとしていられなくて駆けまわらずにはいられませんでした」と記している。

小学生の作者が、野山や大川の野原で駆け回り、危険に遭いながらも夢中で自我を解放していたように、ちよ子も自然界を相手に、スリルと恐怖心を抱きながら自分を試していたのである。

好奇心旺盛なちよ子は、他の同級生と違う信太に興味を抱いている。雑木林で、こうもり傘を持っている信太をちよ子達三人が「とべっ、あほうどり！」と叫び、からかうが、信太もその声に合わせて踵を上げたり下ろしたりして笑っている。ちよ子はそのような信太が気に食わず、彼の傘を遠くへ投げて困らせようとする。しかし、信太は楽しそうににこにこ笑っている。

> ちよ子の考えでは、あそぶためには、ひとつの方法しかないのです。一方がどなれば、相手はどなりかえします。一方がぶてば、相手はぶちかえします。それがいちばんのやり方なのです。いままでずっとそうしてきたのです。ところが目の前の信太は、ちよ子が、いくらからかっても、楽しそうにしています。どなっても、にこにこと笑っているのです。……何を言ってもただ、笑って、首をたてか横かにふるだけで、いつも遠いところを見ているような顔をしているのです。（47・48頁）

ちよ子は「もうすこし、もうすこし」と思って信太に詰め寄るのだが、手応えがなく、彼女の胸はいまにも「ぱん！」と破裂しそうになる。そこでありったけの声を張り上げて「とべっ！あほうどり」と叫び、泣きだしそうになりながら一人駆け出していく。ちよ子は信太の目が、ちよ子達に向いているのではなく、「どこかはるかなところを見ているような、遠い目」であると感じている。ちよ子は、胸の奥の方にある「何か」を「くうーっと押さえつけ」、信太が仕返しをしてくれることを願い、いたずらを繰り返す。しかし、彼は笑うだけである。遊びを成立させるために互いが対等であることを、ちよ子は信太に要求するが、応じてもらえない。その結果、一方的にいたずらをしている自分が悪いように思え、そう思わせる信太を怒りたくなるのである。

ある日、ちよ子は信太の宝物を見る。「はるかなところを見ているような、遠い目」をしていた信太の視線と、ちよ子の視線が重なり互いに共感しあう。宝物はガラスのかけら、釘、クワガタムシの鋏の部分など、いわゆるギャング・エイジの子ども達が大切にするものである。ちよ子の目は「きらきら光って」おり、信太は満足そうに笑っている。それがしゃくに障り、ちよ子は「ガラクタじゃないの」（86頁）と言って貶す。ちよ子も宝物の綺麗さに感じ入り、信太の感性に共感しながらも素直になることができない。負け惜しみで「ガラクタ」と言い放ったちよ子であるが、彼女の宝物も二つの平たい石である。この宝物は大人の気分を味わえるものだから「ガラクタ」ではないことを証明するために、石を運動靴のかかとに入れ、ハイヒールを履いているかのようにして歩く。それを嬉しそうに見ている信太を、ちよ子は大人になったような気持ちで見下ろす

と「心細いほど子どもっぽく見えて、胸がきゅーっとする」のである。信太の自慢する宝物を貶したにもかかわらず、彼の疑うことを知らない、素直な心に触れ、ちよ子の心は動かされる。大人になったような気持ちという、これまでと異なった別の観点から信太を見つめ、感情が少し変化する。

夏休み、ちよ子は、鼻の先にタチアオイの花びらの鶏冠をつけた信太に出会う。ちよ子の「胸に、何かが、くうっとこみあげ」、「あほうどりはなんて鳴くの？」と尋ねる。信太は得意になって「コケコッコー」と鳴き、両手をばたつかせる。ちよ子はそのような信太にタデの花でつくった「赤まんま」を勧める。

ちよ子は、胸の中がちりちりして、何だか泣きたいような気持ちになりました。ほんものでないことくらい、ちゃんとわかっているはずなのに、むしゃむしゃと平気な顔で食べている信太が、にくらしく思えたり、なさけなく思えたりするのです。心の中では、〈もうやめて！〉と叫んでいるのに、ちよ子は「もっと、もっとお食べ」と言ってしまうのです。信太は、すっかり食べてしまって、からっぽになった草の葉のお皿を、ちよ子に渡して、「ごちそうさん」と言いました。（１２８頁）

「赤まんま」がタデの花と解っていながら、信太はちよ子に勧められるがまま食べる。ちよ子は、彼の単純さや素直さに驚き、不安と罪悪感を抱くが、好奇心を抑えることが出来ない。いたずらの度が過ぎたことで、苦しみ苛立つちよ子は、去って行く信太に向かって「泣きそうだった顔をまっ赤にし、足をばたばたと踏みならして『もう、あほうどりの、あほうどり！』」と怒鳴る。信太の単純さ・純粋さに太刀打ち出来ないのである。ちよ子は信太をいたずらで振り回そうとするが、却って振り回わされる。これまでちよ子が体験してきた遊びの方法が信太に通じない。信太の単純さ・純粋さ、不器用さがちよ子の感情をかき乱し、罪悪感を抱かせる。信太は感情と行動が一致しているのに対して、ちよ子は本心に反する行動をとってしまう。だから、信太と接するたびに、自分の感情を持て余すこととなる。それでも、信太を無視することが出来ず、いたずらを繰り返す。それはちよ子にとって、信太が未知なる存在あり、その存在への好奇心にはスリルと興奮が伴うからである。

夏休みの中頃、中学生や上級生に交じり、ちよ子とゆき子、かなえの三人組、そして信太も大川で遊んでいる。信太はいつものように、河原の石をひっくり返して虫を探したり、カメを見たりしている。そのような中、ちよ子は大きな渦に巻き込まれ消えていく、ネムの花に引き寄せられる。

ちよ子が水に浮かんでまわるネムの花に手をのばしたその時でした。ちよ子の体がぐるっとねじれるようになって、それから足が浮きました。川の水が目の前で泡だって、ちよ子はもう、立ってはいなかったのでした。（中略）ちよ子は、川面に浮か

んで、ぐるぐるとまわっていました。（１３７・１３９頁）

近くにいた中学生や上級生が、溺れたちよ子を助けようとするが、渦に近寄ることが出来ない。その時、信太が渦に向かって「まっしぐらに」泳いでいく。挿絵では、信太の姿が信天翁となっている。作者は、信太と「ほんもののあほうどり」とを重ね合わせていることから、今までとは違う、力強く、逞しい、勇気ある信太へと変身させる。この場面は、ファンタジー的要素を織り込み、物語に意外性と感動をもたらす。又、ちよ子や周りの子ども達が信太への見方を変える、象徴的な出来事とも解釈することができる。川岸に集まった大勢の子ども達が「がんばれ、がんばれ、あほうどり！」と叫び、信太を応援する。二人が渦の外へ逃れた時は歓声と拍手がおこる。中学生の二人が、ちよ子を仰向けにして両方からささえ、岸に向かって泳いでくるのを皆が迎える。子ども達のこの連帯感は、隣近所で助け合う村の生活によって生み出されている。信太の両親が、大雨の夜、切れた大川の堤防を村人達と一緒に修理している時に事故にあったという話からも、村の生活が助け合いによって成り立っていることがわかる。信太に助けられたちよ子は、これまでのように彼に接することが出来ないと実感する。

〈ありがとう、あほうどり……〉
ちよこは、自分がもう二度と、あほうどりにいじわる（いたずら）をしないだろうと思いました。そう思うと、何だか、心の中がからっぽになったような、かなしく、さびしい気がしました。ほんとうは、もっといじわる（いたずら）して、もっとからかっていたいのに。……そしていつまでも、いままでのようにしていたいのにと思うのですが、いくらそう思っても、これからはできないのです。ちよ子は、いままであほうどりとあんなふうな遊びをするのが、いちばん楽しかったのでした。
（１５２頁　傍線・（いたずら）堀畑）

この文章は初出に従い、傍線部の「いじわる」は（いたずら）とし、「ちよ子は、いままで…」を補う。

信太は知的障がい者である。しかし、ちよ子は信太をそのように捉えず、性格の一つとして受けとめている。だから、他の子にとる態度と同じように信太にも接する。しかし、いつもにっこりと笑っている信太の言動に違和感を抱き、それを確かめるように「いたずら」を繰り返していく。それは、ちよ子にとって信太という未知なる存在を探求する遊びなのである。また、ちよ子も「ほかの子とどこか違ったところ」があった。落ち着きがなく、自分の感情をコントロールするのが苦手である。信太と対称的である。ちよ子は、信太と接しながら、彼の純粋さや素直さに救われ、彼の勇気や強さも感じ取っていたのではないか。そして、信太がちよ子を助ける場面は、ちよ子が彼から助けられる存在でもあると認識したことを、ファンタジー手

法で具体的に描いたと解釈することもできよう。ちよ子は信太の有りの儘の姿に接しながら、彼から影響を受け、そして有りの儘の信太を認めるようになる。後に、作者は子どもの世界では障害を持つ子、そうでない子の区別は存在せず、「ありようにあるがまま受け入れ成長してゆく、それは、どこに生まれ育とうとも、そのような時期が人にあると思う」と述べている(7)。信太がどのような人間かを、子どもなりに理解した時、ちよ子の未知のものを探求する遊びは終わる。それは一つの「発達課題」を克服したことに繋がる。学童期で重要なことは「友達と体験を共有すること」と佐々木正美が指摘するように、ちよ子は信太と体験を共有し成長していったのである。

## (四) ちよ子像の背景

信太像と同様に、ちよ子像にも作者の子ども時代が反映されている。それについて作者は次のように述べている。

私は「あほうどり」の信太を書きましたが、信太は私が子どもだった頃、身近にいた男の子でした。その子が知的障害をもつ子どもというふうにはまったく考えもしませんでした。信太は信太だったのです。私だけがそう思っていたのではなく、村でも学校でも誰も信太を「知的障害をもつ子ども」とは考えていなかったと思います。そして当然その存在は深刻でもなかったのです。その訳は、……現金収入こそなかったけれど住む家と食べるものには恵まれていました。そして村という共同体で支えあうことができていた時代でした。(書簡　２０１５・９)

当時、村の人々が信太のような子どもを知的障害者と考えずに接していたことが解る。大人の言動は子どもにも影響を与える。ちよ子が他の子に対するように信太にも「いたずら」して遊んだことは不思議ではない。ちよ子は、信太だけではなく、他の子とも同じような「いたずら」遊びをしていたのである。それは、やられたらやり返す遊びを「いままでずっとそうしてきたのです」(48頁)から読み解くことができる。作者は幼い頃、祖父に連れられて人吉の両親や兄姉妹が暮らす家へ行く途中、知らない子どもとの小競り合いが楽しかったと回想している。その当時の子どもは、自分のテリトリーに知らない子が入って来ると、互いに小突きあい、憎まれ口をたたき、にらみ合って別れるのが普通だった。そこにはスリルと興奮があり、嫌な感じは残らなかったという。このような小競り合いも、子どもにとっての遊びなのである。一緒にいた祖父は、犬の鎖を引くように、作者の手を引くだけであったという。ちよ子が信太に「いたずら」をするは、この小競り合いのようなものであろう。河川の氾濫や自給自足に近い生活の中、村人達が支え合って暮らしていくことは必要不可欠である。その支え合いは、大人達が子どもを見守り、育てるという風潮を生みだす。だから、子どもの「いたずら」が度を超すと、大人の注意があったと推察

する。子どもの小競り合いに対して、一緒にいた祖父が何も言わなかったことからも、子どもを見守る大人の目を窺うことができる。又、村人同士の支え合いから、子どもも親も互いに顔見知りであるから、「いたずら」の度を超すことはなかっただろう[8]。

　次に、ちよ子が溺れ、助けられた直後の心情についてである。そこにも作者の体験が反映されている。

　ちよ子はなんだかとてもかなしい気がしました。何がかなしいのかよくわからないのに、泣きたいような気がするのです。おぼれずにすんで、ほんとうによかったのですが、うれしいよりも、ずっとかなしいのです。（中略）〈ありがとう、あほうどり…〉ちよ子は自分はもう二度と、あほうどりにいじわる（いたずら）をしないだろうと思いました。そう思うと、何だか、心の中がからっぽになったような、かなしく、さびしい気がしました。（151・152頁　傍線・（いたずら）堀畑）

　この場面は、中学生の作者が大川を犬かきで、初めて泳ぎ渡きった時に抱いた心情を参考にして描かれたと考える。毎夏、大川で泳ぐ作者は渡し舟の船べりに掴まり、まん中辺りまで行き、そこから岸に向かって犬かきでやっと戻るというのを繰り返していた。しかし、ある日突然、川を渡ろうと決心する。「深みにさしかかってからぐんぐん流され、（中略）いやというほど水を飲み、速い流れに乗って大岩にぶつけられてもうだめだと思った時、足が川底にあた」った。その時、手が届かなかった未知の地に立ったという実感を抱く。そして、向こう岸に建つ、作者の家の屋根と煙突を眺め、両親の日頃の様子を「心の目」で見た瞬間、「なつかしいという感情」が湧き上がる。「私の家はどこかはかなく、小さく見えました。あまりにもはかなく見えて、泣きそうになりました」と述べる。生と死の狭間を行き来して抱いた感情は孤独感や無常観に近いものであろう。その日を最後に、作者は球磨川で泳ぐのをやめる。一つの課題を乗り越えることで別の風景が見えてくる。いわゆる見方や考え方が少し変化するのである。それをちよ子にも描く。

　信太という未知の存在を理解し受け入れたことで「いたずら」遊びが終わり、ちよ子は「かなしく、さびしい」気持ちになる。何も解らず無邪気に遊んでいた自分に別れを告げなければならないからである。その後、ちよ子は母親と一緒につくったぼた餅を持って、信太の家へ行く。信太に一番に食べてもらう為と、彼を前にしてお礼を述べる為である。これは両親の指示の下での言動である。しかし、信太を毎朝、誘って学校に行くことは、ちよ子自身の提案であった。ちよ子は信太に対して、自分に出来ることを考え、行動するようになったのである。このように一つの課題を乗り越え、別の風景が見えたことで、自分の役割を見出すという社会的行動が芽生える。

　そこで、ちよ子像についてまとめると次のようになる。

① ちよ子像には、児童期とギャング・エイジの初期の特徴が描かれている。
② ちよ子像には、知的障がい者である信太に対して、偏見を持たず、遊びの中で有りの儘を見ながら理解していく姿が描かれている。
③ ちよ子が信太を理解するという「課題」を乗り越えた時の心情には、作者が中学時代に大川を泳ぎ渡った時の心情を反映させている。

以上、信太像とちよ子像を見てきた。そこから読み取れるのは子どもの心の成長である。佐々木正美は、子どもにはその時期、その時期で乗り越えなければならない「課題」があると言う。子どもは、その年齢の世界を十分に生き経験することで、次の年齢へと進むことができるということであろう。信太像で導いた、自然との交歓によって直接湧き上がってくる野性的な喜びや、不器用であるが純粋という性質は、主に幼児期の特徴である。ちよ子像で導いた、探究心旺盛で、あらゆる物に対して感覚的に働きかける性質は児童期の特徴であり、集団で行動するのは、ギャング・エイジの初期の特徴である。そこから、二人の性質を併せ持つ一人の子どもの姿を想起することができる。つまり、信太とちよ子で、小学四年生の子どもの性質を表現しているということである。この解釈は、子ども時代の作者の心情を、二人に重ね合わせていることからも首肯できよう。幼児期、児童期、学童期のギャングエイジ初期へと順次成長を重ねている、小学四年生の子どもの姿である。それぞれの年齢から得た産物を心に蓄え、成長している子どもの姿である。そして、この成長はゆっくりと流れる「子どもの時間」の中から生まれたのである。

## 二　子どもの時間

「子どもの時間」とは、日常的な時間（近代的な時間）と異なり、効率性や能率性を求めず、ゆっくりと流れる時間である。だから、何度も失敗と挑戦を繰り返すことが出来、喜びや達成感、後悔、不安などを身体で感じ取っていくことが出来る。また、その時間は、大人にとって見慣れたものが別の光を帯びてくるという「異化効果」をもたらし、現代社会の問題点を浮き彫りにするという特徴を持つ。

明石要一は戦後の子どもを生活サイクルで三期に分ける。第一期は１９５４年から１９５９年で、「年中行事」を単位としたサイクルである。お盆やお正月など季節の行事にあわせた生活で、小遣いもそれに合わせて貰っていた。子ども達は、大きな集団で外遊びに興じ、ギャング・エイジも体験する。第二期は１９６０年から１９７４年で、子どもの生活サイクルは「月単位」に変わる。給与生活者が大半を占める中で、子どもの小遣いは月決めとなる。少年漫画とテレビが普及する。子ども達

の遊び集団は、第一期より小さくなり、ギャング・エイジを体験しない子どもが出現する。第三期は1975年から1991年で、サイクルが「週単位」となり生活のテンポが一層短くなる。「乱塾時代」という言葉が登場し、テレビや漫画、ゲームが普及する。子どもたちの世界は、放課後が消え、仲間集団が存在しなくなる。

　1947年生まれの作者は、明石が指摘する第一期（1945〜1959）に子ども時代を迎えている。いわゆる、ギャング・エイジを体験している年代である。人前で喋ることを苦手とする、内気な少女は一勝地の家族の許に戻ったものの、兄姉妹4人がいる賑やかな生活に慣れるのに精一杯であった。母親は「子どもは子ども同士」という考えから、娘を特別扱いしなかった。遊びにおいても、少女は兄姉妹たちが仲間と駆けまわっているのに必死の思いで付いて行った。その一方、姉の影響で本を手にするようになる。渡村に一家で戻って来てからも、内気な少女は、本の世界に夢中になる一方で、球磨川の岸辺を村の女の子達と一緒に駆け回り、ふらふらになるまで遊び続ける。これより、作者の小学校時代の遊びは、異年齢の集団で外遊びをしていたことがわかる。作品『あほうどり』は、この遊びを背景として描かれていることは、作品考察で既に示した通りである。

　建築家である仙田満は、外遊びが子どもの「創造力を開発する」(9)ことから、その重要性を主張する。「一九五五年ごろ、子どもたちの外遊び時間は2・7時間もあった。それが七五年ごろには、1・4時間に減っている」とし、その理由を二点指摘する。一つ目は塾やお稽古で子どもたちが一緒に遊べる時間がとれなくなっていること、二つ目はテレビやテレビゲームが子どもたちにとって魅力あるものとなっていることである。又、仙田は日本の子どもたちの遊びの環境について、高度経済成長による都市化の影響を受け、一九八〇年から「あそび空間」が限界まで小さくなり、自然遊びや鬼ごっこなどできなくなっていると指摘する。

　霊長類学者の河合雅雄は、人類の存在を根本から形成している諸性質を「内なる自然」と呼び、高度に文明化した社会によってそれが脅かされているという。子ども期は「群れたいという内的な自然の欲求」が仲間あそびを求め、その中で社会性を身につけていく。しかし、その欲求は塾やお稽古事、テレビやゲームなどに阻害され、その結果、「野生の喪失もしく退行といった面での家畜化現象」が起こっているのではないかと危惧する。そこで「自然の中に包まれ、体にしみこむごとくに自然を感じること」を提言する。「いのちの不思議と畏敬の念」が呼び起こされ、感性も潤されるからある。

　仙田と河合は、大人からの干渉を離れた外遊びや集団遊びが、子ども達の感性を豊かにし、創造力を育むと主張する。

　本作品では、ちよ子や信太など子ども達が外遊びに興じている。信太は虫を観察し、ちよ子達は野山で草いちごやぐみの実

などの食べ物を探して遊ぶ。夏は、村の子ども達と大川で泳いだり、水遊びしたりする。二人の宝物は外遊びで手に入れた物で、想像力をかき立てるものであった。作者は、野山や大川では集団で遊んでいても好き勝手が許され、何かを空想したり、花や河原の石を相手に「自分と違った子どもを想像」したりすることができたと記している。一方で「子ども心に危なかったと思うことはしょっちゅうです。こういった事は親には一切言えません」と述べるように、外遊びには危険を伴う。このような中で、ちよ子は信太へのいたずら遊びを繰り返す。ちよ子は信太の知的な障がいを性格の一部として受けとめ、特別視しなかった。やられたらやり返す方法をとらず、いつもにっこりしている彼の穏やかな性格に苛立ちながらも、引きつけられていた。そこに、彼に対する安心感や信頼感があったのであろう。そして、信太から助けられたことによりちよ子の心は動く。このちよ子の成長は、外遊びや集団遊びの中で培った想像力や豊かな感性、子どもは子ども同士で学ぶという事からもたらされた。また、信太を理解することに納得がいくまで時間をかけたことも、ちよ子の成長にとって重要であった。課題を乗り越える時間を子ども本人に任せるということである。このように、子ども達が自然の中で自発的、能動的に行動し、自分達の世界を自分達自身で創り上げている。これが本作品に描かれた「子どもの時間」である。

１９７０年代後半、高度経済成長の陰が見えてくる。児童文学では、公害問題や家庭崩壊、受験戦争など子ども達を取り巻く問題を中心に据えた作品が生まれる。しかし、解決策を提示することができず、その傾向は現在まで続いている。そのような中で、作者は誰でもが体験する「子どもの時間」を描く。読者はその時間に共感し、自分自身の体験を顧みることで、現実を見つめる視点を変える(10)。例えば、信太が持つ野性的な喜びや純粋さ、ちよ子の偏見を持たない目で現実を見つめ直すと、違ったものが見えてくるだろう。このように「子どもの時間」から導き出される新しい視点を、今村作品は提示しているのである。

**【注】**

（1）「神話的時間」は、鶴見俊輔が熊本子どもの本の研究会主催の講演で発したもので、言葉の定義付けが明確に行われていない。このため、言葉が一人歩きをしているという現状である。筆者は、年齢を小学生までと限定した上で、この時間を「子どもの時間」と改める。拙稿「ゆきのよあけ論」は『国語国文研究と教育』第58号（熊本大学教育学部国文学会）を参照されたい。

（2）初期四部作とは『つるべっ子』『あほうどり』『ふたつの家ちえ子』『良夫とかな子』である。

（3）拙稿「あほうどり論（上）」は、『国語国文学研究』第50号（熊本大学文学部国語国文学会）を参照されたい。

（4）障がいも個性だから特別なこととして区別するのは本来おかしい。

色々な人がいて当たり前という緩い感覚が一番良い。シビアな面は、その道の専門家がやればいい。違いを認め合おうと区別するからおかしくなる。そのような旨を作者の知人で、障がいをもつ子ども達に携わる専門家が話している。

（5）日本の神話や説話、昔話には、体の小さい主人公が異能を発揮し、人々に幸いをもたらす話がある。この主人公は「小さ子」と呼ばれ、神の子として理解されている。

（6）作者の生い立ちについては、拙稿「ふたつの家のちえ子論（上）」『国語国文学研究』第49号）・拙稿「ふたつの家のちえ子論（下）」『方位』第31号（熊本近代文学研究会編）を参照されたい。

（7）この姿勢は、絵本『もみの木がっこうのうんどかい』（女子パウロ２０１４）でも貫かれている。

（8）２０１３年に筆者は球磨村を訪れた。その時、案内していただいた大瀬克彦先生（元小学校校長）から、この村では子ども達が素直で非行とは無縁ですという話を伺った。

（9）イギリスの動物学者デスモンド・モリスが「あそびは、それが目的ではないが、ボーナスとして創造力の開発をもたらす」と主張している。

（10）「子どもの時間」を描いた『ふたつの家のちえ子』を手にした読者達の感想に、作者は一つの共通点を見出している。それは、読者が作品の感想を語るだけではなく、あたかもその話を今発見したという風に、読者自身の物語を話し出していることである。


**【参考文献・資料】**

今村葦子直筆資料
今村葦子と堀畑の往復書簡　２０１５・９
今村葦子講演録２０１８・７　熊本子どもの本の研究会主催
今村葦子「わたしを語る　あのことこのこ」『熊本日日新聞』２０２０・７・30
沼田森『図書新聞』１９８７・４・11
谷川俊太郎「理由なき喜び」『人生のエッセイ６』
長谷川博『アホウドリ』平凡社　１９８４
最首悟「児童文学」『最首塾』　初出『読書人』１９８４・４
小林さえ『ギャングエイジ』誠信書房　１９６８
河合雅雄『子どもと自然』岩波新書　１９９１
佐々木正美『子どもの心はどう育つのか』ポプラ新書　２０１９
明石要一『ガリ勉じゃなかった人はなぜ高学歴・高収入で異性にモテるのか』講談社＋α新書　２０１３・『子どもの規範意識を育てる』明治図書２００９・「戦後こどもの生活空間の変化に関する一考察」『千葉大学教育社会研究第53集』１９９３）
仙田満『子どもと遊び』岩波新書　１９９２
宮川健郎『現代児童文学の語るもの』ＮＨＫブックス　１９９６
本文の引用は『あほうどり』（評論社　１９８７）による。



**【附記】**

本稿執筆に際しては、作者である今村葦子氏より貴重な資料とご教示を賜りました。記して深く感謝申し上げます。



（ほりはた　まきこ／大学院二五回修了）